

聖霊降臨 使徒書 2：1～11、ヨハネ 20：19～23 聖霊降臨は逆バベルの現象

新型コロナウイルスの感染防止のために2ヶ月弱、公開ミサが中止されていました。ミサが再開された今日は、聖霊降臨の主日です。先週の“主の昇天”は、イエス様が地上での働きを終えた後、福音宣教は教会にバトンタッチされる意味がありました。その使命を果たすためには、特別な上からの力が必要です。それが、今日の聖霊降臨で与えられます。

第1朗読では、聖霊降臨の出来事を「激しい風」「炎」と表現しています。人がコントロールできないほど、働く力が強いことがわかります。そのような聖霊が分かれて「一人一人の上にとどまった」とあります。心の奥深くに入って、物の見方や行動が変わっていきます。

聖霊が与えられて、様々な母国語を持った人々が、それぞれ自分の言葉で使徒たちの話を聞いて理解します。この話は「バベルの塔」の話（創世記 11：1～9）を思い起こさせます。人間が神の御意志を顧みず、人の力だけで繁栄を築きこうとしたとき、神はこう言われます。「彼らの言葉を乱し、互いに言葉が通じないようにしよう」（11：7）と。これは、言葉の多様性の話ではありません。もし、人間が神様のみ旨を無視して、自分たちだけで世界を動かそうとしたら、個人の欲がぶつかり、お互いに理解できなくなります。「バベルの塔」はそんな人間の現実が語られています。そして、聖霊降臨でイエス様を生かしていた霊が、私たちに与えられます。バラバラだった人間の思いが神の思いにまとまる「逆バベル」の状態になります。イエス様と同じ“神様の霊”をいただいて、私たち一人一人が神様の愛を伝える（福音宣教する）ようになります。

ヨハネ福音書（14：15～16、26）では、私たちに与えられる霊を「パラクレートス」と呼んでいます。ギリシア語をそのまま訳すと「傍にいて叫ぶ者」という意味になります。「慰めの子」「弁護者」と訳されています。聖霊が私たちの傍にいて、母親のように慰めてくれたり、弁護士のようになりに有利になるように弁護してくれます。だから、困難が待ち受けていても挑戦できるのです。

聖霊をいただいた私たちの中にイエス様も留まり、父なる神様も共におられます。私たちは父と子と聖霊の交わりの中で生かされ、使命を果たしていきます。

今、私たちに与えられている使命の1つは、新型コロナウイルスによって大きな打撃を受けている人たちを支援することです。徳山教会に来られているベトナムの若者たちの生活も様変わりしてしまいました。日本に働きにきてくれた彼ら、彼女らに温かい心を届けましょう。

「一粒の愛のプロジェクト」への献金をしていきましょう。